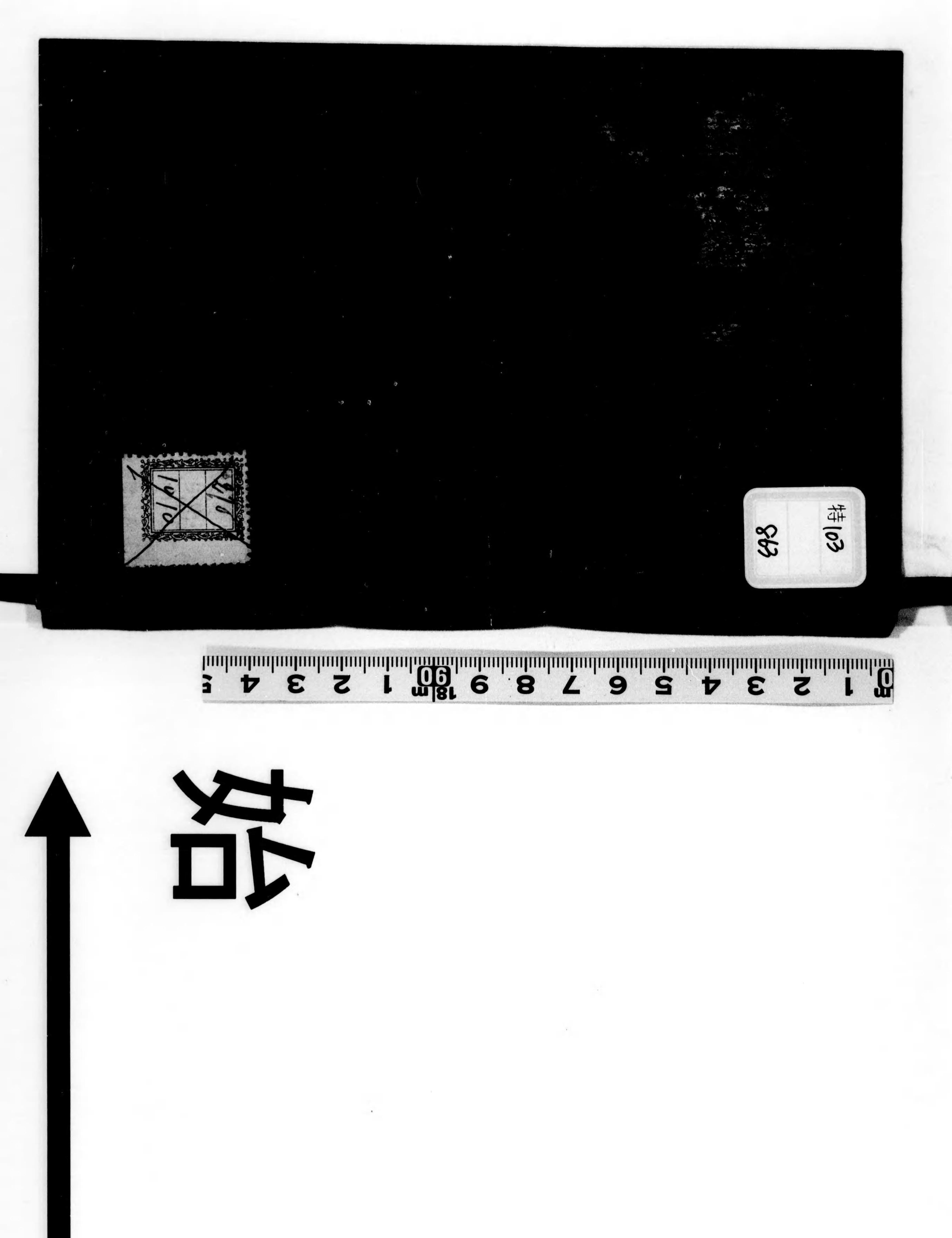

禁
特103
863

# 歷代聖教諸宗一覽

77103
863

宗教研究室藏

4号103
863

# 二代聖教諸宗一覽

上

大正
4. 8. 16
内交

# 緒言

宗祖の曰く教の淺深を知らざれば理の淺深を辨ふる者なしと譬へば高きに登るには必ず低きよりし深きに至るには必ず淺きよりするが如し故に天台大師は東流一代の聖教を五時八教に判じて淺深勝劣を釋し吾祖は三重の秘傳に約して四重の興廢を論ず嗚呼

若し此の義を曉るあらば一代聖教は鏡に懸て陰りなく三時の弘教は掌にありて覩るべきなり當に知るべし生死長夜を照す大燈明元品の無明を切る大利劍此の法門に過たるはなし。余は去る明治三十七年一月本宗法道會布教機關として發刊せる法の道第九號に此の一代聖教諸宗一覽の圖解を掲げ簡に



其の勝劣淺深を明かにし初信の便に供せしことありき今復東京本宗の篤信家某氏等是れが再版を爲し世に公にせんことを請ふ余は之を快諾し上梓せることになりぬ

大正四年七月

著者識

# 一代聖教諸宗一覽　目次

## 上卷の部


第一、諸經諸宗略圖……一
第二、五時八教の判釋……一
第三、華嚴部……三
第四、阿含部……八
第五、方等部……一一
第六、般若部……一三
第七、法華部……一四
第八、念佛無間論……二三
第九、禪天魔論……二五
第十、眞言亡國論……二九

第十一、天台過時論……三〇
第十二、日蓮聖人の弘敎……三三

## 下卷の部

第一、日蓮宗略圖……一
第二、日蓮宗々義……一
第三、本門法華宗々義……八
第四、顯本法華宗々義……一一
第五、本妙法華宗々義……一七
第六、日蓮各派の本尊……一九
第七、日蓮正宗々義……二七
第八、日蓮正宗の本尊……三八



## 一代聖敎諸宗一覽上

○說處——中天竺摩訶提國寂滅道場等七處八會

○三七日說——權大乘——別敎——圓敎——兼

○頓敎——亦有秘密及不定敎

○乳味

○擬宜

○寅刻

## 華嚴部

○華嚴宗祖師

天竺——馬鳴菩薩、無著菩薩、世親菩薩、龍樹菩薩

漢土——杜順、智嚴、法藏、澄觀

日本——良辨

# 阿含部

○說處——中天竺波羅奈國鹿野苑等

○十二年說——小乘——三藏教——單

○漸教——初亦有秘密及不定教

○誘引　○酪味　○卯刻

○俱舍宗祖師——天竺——世親菩薩
　阿毘達磨俱舍論

○成實宗祖師——天竺——訶梨跋摩
　成實論

○律宗祖師——天竺——迦葉尊者
　四分律等　　漢土——道宣
　　日本——鑒眞



# 方等部

○說處——欲色二界中間大寶坊等

○十六年說——權大乘——藏 通 別 圓——對

○漸教——中亦有秘密及不定教
○彈呵

○法相宗——祖師——天竺——無著——世親菩薩
　解深密經唯識論等　　漢土——慈恩
　　日本——智鳳

○浮土宗——祖師——天竺——昭玄——道綽——善導
　觀經双觀經阿彌陀經　　漢土——樹曇——世親——善導
　　日本——法然——親鸞——綽空

○禪宗——祖師——天竺——龍樹——迦葉——達磨——慧可——菩提達磨
　　漢土——曇無讖——道生——慧能——蘇味道
　　日本——榮西——惠能

○眞言宗——祖師——天竺——金剛頂經——無畏——不空
　大日經蘇悉地經　　漢土——善無畏——善無畏——菩薩
　　日本——弘法——空海——菩薩

○生蘇味　○辰刻

## 般若部

○說處——鷲峰白露池等四處十六會

○十四年說——權大乘——通 別 圓——帶

○漸教——終亦有秘密及不定教

○濤汰　○熟蘇味　○已刻

○三論宗——祖師——天竺——龍樹菩薩
　　漢土——羅什
　　日本——觀勒

中論百論十二門論等



## 法華部

○處說中天竺摩訶提國靈鷲山及虛空二處三會

○八年說——實大乘——圓教——非兼但對帶
　　純圓一實教

○非頓非漸非秘密非不定

○平等大會　○醍醐味　○午刻

○天台法華宗——祖師——天竺——龍樹及世親
　　漢土——天台大師 妙樂大師
　　日本——傳教大師

像法初五百年中天台妙樂出現依憑法華經弘通之次五百年中傳教弘之日本

○日蓮宗——祖師——日本——日蓮聖人
　　日興上人

末法初出現而弘宣本門壽量文底下種妙法爲末代衆生顯示本門戒檀大本尊

# 一代聖教諸宗一覽圖解　上

○仰も釋尊一代五十年の說教を天台大師は五時八教に判釋せられたり此の五時八教は別圖に示すが如し　蓋し此の五時八教に就ては深き法門あり　夫れ一切經の法躰と者三藏教通教別教圓教なり此の四教の外には佛の所說は一宇一句もあることなし三藏經と云ふは佛善巧方便を設け阿含小乘部を說き玉ひしなり此の經には三科七十五法と云ふ法門を說て有爲無爲の法を分別す即ち有爲とて世間のこと又は無爲とて無常の事共を說き給ひたり夫れ世間の相は有なるものなれども一として滅せざるものな

し滅し已りなば皆無なるものなりと但空の理を説き復人天の因果を明しては彼の外道造化生天説の虚妄なることを説破せられしなり故に是を小乘教と云ふ次に○通教と云ふは小乘にも大乘にも通ずる故に權大乘と云ふ次に○別教と云ふは佛と衆生と別別に説き玉へる故なり是は尚圓教に近き故に權大乘と云ふ次に○圓教と云ふは是は誠に成佛の法躰なる故に實大乘と云ふなり○斯の如く藏通別の三教の麁法を説き玉へたれども是れ元より別物にあらず實大乘圓教の中より分説し玉ひたる法なり○故に法華經に於一佛乘分別説三と宣べ玉ふは是れなり妙樂の記の三には言二從一一出二無量一者始從二華嚴一至二般若一來皆從二一法中一



開出乃至法華（但是收二無量一以歸レ一）云云○又同五云く當知其事本無二三一一爲二物方便一權立二三名一との玉ひたり○譬へば色目鏡の如く青黄赤白の種々の硝子板に映ずるも只一の光線あるのみ然れども幼稚は之を知らず硝子板に種々の色ありと思へりされども其の實は一の光線が板の凸凹に映ずるに由て生ずる處の變色なり是れ即法華一乘の光線が衆生機根の凸凹ある硝子板に藏通別の三種の色を現はしたものなり蓋し此の四教を五時に説き玉ふには初に

◉華嚴部○即ち華嚴經なり是は佛御歳三十の時初て中天竺摩訶提國寂滅道場善堤樹下に於て三七日の間説き玉ひしなり其の機

緣は宿世根塾の大機なり即ち法慧菩薩功德林菩薩金剛憧菩薩金剛藏菩薩なんと申せし六十餘の大菩薩が十方の諸佛の國土より教主釋尊の御前に來り玉ふて賢首菩薩解脫月等の菩薩の請に趣ひて十住十行十廻向十地等の法門を諸菩薩凡夫大機の爲に別圓二教を說き玉ふ是を頓教と云ふ頓教とは夫れは教の同じからざるは根性の融せざるによる佛成道して自證の大化を設くるに利根の者は直に益を得るなり即ち手がかりを用ひずして初より佛の證りの儘を說くを頓と云ふ○漸とは鈍根の者には其の機相應の小法を說て誘引するを漸の初とし大小相對して小執を打挫き大機を生ぜしむるを漸の中とし大機内に起り小を耻る念切なれば小法を會て其の大機を引立るを漸の末とす○要するに小乘をかりにして漸々に大乘に引誘するを漸と云ふなり○秘密不定は前四時の中或は人を隱し或は人を顯はし大小の機類同聽異聞して聽く所の教と得る所の益と同じからざるを云ふ即ち同座に並び聞き其の聞く人互に相知らず小乘を聞て大乘の益を得亦大を聞て小益を得るを秘密不定教と云ふなり○蓋し隱密して相互に知らせぬゆへ秘密なり大小乘の法各々聞益を異にする故に不定なり○不定とは具さには顯露不定教と云ふなり蓋し同座に並び聞き其の人互に相知て之を聞て小益を得小を聞て大益を得を云なり蓋し人相知る故に顯露なり定格にはつれる故に不定なり

○此の時を兼と云ふ又擬宜等の中には擬宜なり又十二時に喩れば日輪朝出て初に高山の頂きのみ照し玉ふ如きの時なる故先照高山と云て寅の刻なり又五味に喩れば乳味なり五味と申すは靈山に草あり柔懦草と云ふ牛之を喰へば即ち醍醐味を出す○初に牛より出る乳を煎ずれば酪味となる次に復煎ずれば生蘇味となる又是を煎ずれば熟蘇味となる是を復煎ずれば醍醐味となるなり此の華嚴を說き玉ふ佛を法身如來と云ひ國土を實報土と云ふ帝網無碍の境界なり偖て佛三七日が問此の別圓二教を說き玉へども中々未だ大乘の理を聞得る機分にあらざるが故に直に之を止めて次の阿含經を十二年の間說き玉ひしなり○此の經を所依



として宗を立るを華嚴宗と云ふ○龍樹天親等の論師は之を天竺に弘傳す漢土には杜順智儼等の人師有て五教十宗を立一代聖教を華嚴經に攝して一代超過の義を述べ佛の法輪を三轉法輪と立て華嚴經を以て佛の第一根本法輪と云ふ剩へ法藏澄觀の代に至て一代諸教の中には華嚴經第一法華經第二涅槃經第三と立天台の一念三千の法門を自宗に盜み入れたり日本國には聖武天皇の御宇に審祥新羅より此の經を渡して良辨に授く良辨聖武帝に授けて奈良東大寺を建立せり故に日本にては良辨を祖とし東大寺を以て本山となし明治五年中より淨土宗の所轄たりしを十九年獨立の認可を得て再建せり　次に

○阿含部○是の時は佛但淺墓の小乘四阿含を說き玉ふ故に阿含經と云ひ小乘三藏經と云ふ四阿含とは一には增一阿含經此の中には廣く人天の恩果を明し有爲無爲の法を分別す二には長阿含經是には彼の九十五種の外道の諸の邪見を破し造化生天說の虛妄なる義を駁擊せり三には中阿含經是は諸の深義を說き即ち眞諦の道理を明し玉ふなり四には雜阿含經是には四禪定等の一切の禪定を說けり禪定とは心を一境に止めて餘境を緣せず餘念を起さず散亂心を離るゝなり然るに右明す所の四阿含は各明す所の義の多分に從ふて約すといへども總じては四阿含とも三界六趣遷流無常なる理を衆生に知らしめ誘引敎化し玉へり其の所說



の法體は苦集滅道の四諦の法門なり苦とは煩惱の義にしてせまりくるしみなやむと云事なり人々過去の世に於て作り重たる惡業煩惱の因が今生に報ひ來て苦の果を得るなり因は種の義果は實の義に而因果の二字は共に譬なり是即前世に善惡の種因を作りねれば後世に必ず善惡の實果を得る故なり諦とは審理と訓してあきらめことはると讀む言意は佛法を修して此の苦果の依身たる理を實の如くあきらめ知る故に四種共に諦の字を附す集とは招集とて諸の惡業煩惱人々造作し招き集る義なり道とは能通の義にて正道を修學して菩提涅槃の彼岸に達するを云ふ涅槃の果を岸に譬へ生死を海に譬へて此の道諦の船に乘て生死の大海

を渡り涅槃の彼岸に至る故に道は是れ能通なり滅とは滅無の義なり煩惱を滅除し無漏涅槃の果を得るを滅諦と云ふ衆生苦集の煩惱をは熱惱に譬へ道滅を清涼の風に譬へ此の道諦の修行に依て苦集の熱惱を滅除し無爲解脫の清涼の身と成りぬ○是を三藏經と云ふ界内の鈍根の機の爲に佛修證の法を教ゆるに經律論の三藏部帙各別なるが故なり○此の時を但と云ひ十二時に配すれば日輪漸く幽かに谷底を照し玉ふ如くなるに依て次照幽谷と云ひ寅の刻なり五味に喩れば酪味擬宜等の中には誘引なり此の經は華嚴三七日の後天王の請に依て派羅奈國鹿野苑にして小機の爲に十二年の間說法し玉ふなり此の能化の教主は一丈六尺の娑婆同居の佛なれば劣應身なり俱舍成實律の三宗は此の經を所依として宗旨を建立せり次に

**○方等部**○是は佛欲色二界の中間大寶坊と云ふに於て十六年の間說き玉ふなり此の方等の時は最早一切の衆生五戒十善戒等の事をも知り大乘の理をも聞き得る機あるが故に夫々の機に對し藏通別圓の四教を對破比較して說法し玉ふなり○之に依て此の時を兼等の中には對なり擬宜等の中には彈叮なり十二時に喩れば六七時の時なる故に食時と云ふ辰刻なり化儀中には漸教なり秘密なり不定なり五味に喩れば生蘇味なり○此の方等を彈叮と云ふ事は二乘等前の鹿苑の時に三藏經を學して僅に界内の見

思の煩悩を斷じて羅漢の小果を得て涅槃を成せりとなし今や斷ずべき煩悩なく證すべき悟りなしと思へり是を同入法性の思ひとて佛と同等と思ふ心なり○仰も〳〵佛は頻りに大乘の法を説て之を諭さしめんと欲すれども二乘の小機は未だ熟さゞるが故に信ずる能はず加之ならず還て誹謗して惡道に墮せんことを慮り先つ之を引き誘ひ方便の三藏淺近の教を説て界内の見思を斷じ一期の報命終らば無餘灰斷を期すべき旨を明せり今夫二乘の小機は生死の海に在て重苦を受くるを悲み早く煩悩を斷じて永く生死の苦を受く可らずと願ふが故に佛其の機縁に應じて小乘淺近の經を説て無餘の灰斷に歸すべき事を教へ玉ふなり然れども是



れ只大乘に誘引せる一時の方便にして遂には大乘に誘導し界外塵沙無明の別惑を斷せしめ假諦中道の理を諭さんとす而るに二乘は心に之れを知らず但三藏の法門のみ自己の心意に適し至れり盡せりとなす故に此の大乘方等の法を説て彼の二乘の執情を拂斥す是を方等の彈叮と云ふなり淨土宗禪宗眞言宗等の依經も此の部内に在り次に

○**般若部**○此の時は彌よ大乘の機多く之有る故に淺劣なる小乘の三藏經を除き通別圓の三教を相帶して十四年の間説き玉ふ之に依て此の時を帶と云ふ十二時に喩れば十時過なる故禹中と云ひ已の刻なり五味に喩へば熟蘇味と云ふ擬宜等の中には濤汰な

り濤汰とは前の方等の時一向二乘を斥ひて彈叮せりといへども此の般若の時は二乘を誘導して大乘に向はしむる故に爾か云なり夫れ三藏但空の執情を洗ひ洒くの意を般若の濤汰の益と云ふ又は轉教とも云ふ轉教とは佛身子と須菩提等に勅命して菩薩の爲に大乘の法門を轉教せしめ玉ふ爾りといへども兼るに二乘をして大乘に誘引せんか爲なり次に

**○法華部**○夫れ前の阿含方等般若此の三時を束て漸教と云ひ華嚴の時を頓教と云斯の如く頓漸の二法藏通別圓の四教を定りなく說き玉ふを不定教と云ひ又密に說玉へるを秘密教と云此の頓漸不定秘密の四種を化儀の四種と云なり是れ釋迦一佛に限るに



あらず諸佛說法の儀式皆爾り此の化儀の四教及化法の四教を合して八教と云なり蓋し法華の時には一切衆生の機根調熟して實大乘の法を聞べき時なるに依て藏通別の麁法を除去し唯圓教の法華を八箇年の間二所三會に說れしなり二所とは靈山と虛空となり靈山に二度虛空に一度故に三會と云此時の說法を純一と云ふ十二時に喩ば日中正午の時刻なり五味に喩れば醍醐味なり醍醐味と者元素の牛乳をば是を華嚴の時にたとへ其乳を煎ずれば酪味となる是を鹿苑の時に譬又其乳を煎じて生蘇味となる是を方等の時に譬又夫を煎ずれば熟蘇味となる是を般若の時に譬へ又々此を煎ずれば醍醐味となる是れ無上の妙味にして滋藥の最

上なり法華經の理躰に類似せるを以て喩とす○已上述ぶるが如く四十餘年の諸經は唯だ衆生の機根を調達せんが爲の說法なり今正く說時至りとして先法華の序分無量義經を說四十餘年末顯眞實と打破して法華經に來ては世尊法久後要當說眞實と宣玉ひて是れまで種々の道を說示したるは其の實は法華の佛乘に入れしめんが爲なり故正眞捨方便として今迄の權說たる方等般若等の諸〳〵の爾前經をは速かに捨てゝ但說無上道とて此上なき一佛乘道のみ說玉へり○法華經法師品に云く我が所說の經典無量千萬億なり已說今說當說而其の中に於て此の法華經最も難信難解とす云云○疏八云已者大品已上漸頓の諸經也今者同一座席所謂



無量義經也當者所謂涅槃經也云云○記の六に云く縱ひ經有て諸經の王と云とも已今當說最爲第一と云はず云云○斯の如く此の法華經は諸經の王已今當三說超過の經王なりと佛並に天台妙樂等の大聖は定め玉へり尙細に權實の起盡を論ぜば施權開權廢權等の三種の權實あり夫れ權實と者界に約すれば九法界を權とし佛界を實とす教に約すれば藏通別を權とし圓教を實とす部に約すれば華嚴阿含方等般若を權とし法華を實とす權とは假の謀にして暫く用て後廢するを云なり○第一の爲實施權とは釋尊三十成道の翌日より四十二年の間說玉ふ華嚴阿含方等般若藏通別圓の諸教は法華實教の爲に說玉ふ方便なり是れ偏を以て圓を助け

更に異の方便を以て第一義を助顯すとて舍利弗目連迦葉阿難等の九法界の一切衆生をして第十の佛法界の法華經へ引入せん爲の方便教なれば是を爲實施權と云○第二開權顯實とは彼の四十二年の間は舍利弗目連迦葉阿難等の衆生權教を眞實と思ひ佛法界に至るの意なく執權の情轉し難き故に四十二年の間永不成佛の人と云はれて釋迦彌陀大日藥師等の如く佛身を感得せず然るに釋尊七十二の御年靈山淨土に於て無量義經を說て四十餘年未顯眞實と標示を立今正是其時決定說大乘の權即是實の法體を顯し法華經を演說し玉ふ是を開權顯實と云なり此の時舍利弗目連等を始め九法界の一切衆生皆成佛道の素懷を遂凡夫即極即身成



佛の大悟を得て舍利弗は華光如來迦葉は光明如來阿難は山海惠自在通王佛目連は多摩羅婆旋檀香佛と成て能化の釋迦佛は如我昔所願今者已滿足せりと喜び所化の衆生は所願具足心大歡喜の笑を含む是を開權顯實と云ふなり○第三廢權立實とは廢は是れ捨なり開し已りて俱に實なり權として論ずべきなし義廢に當る權轉して實となる所廢躰亡しぬとて舍利弗目連迦葉阿難等の一切衆生皆一同に爾前四十二年の華嚴阿含方等般若の藏通別圓の教に聊か意を止めず但此の法華經の法躰に安住して正直に方便を捨て丶但無上の道を說くの深意を栖とし玉ふ處を廢權立實とは云なり夫れ爾前四十餘年の諸經と後八箇年の法華と權實の淺

深斯の如し次に

○法華經の極意は吾祖日蓮聖人判じて曰く法師寶塔の兩品より事起り涌出壽量の二品に事顯れ神力囑累の二品に事畢んぬと夫れ釋尊七十二歳の一月一日より説時已に至れりと已に述ぶるが如く權實の起盡を立而して説法入定雨華地動衆喜放光衆集現瑞疑念發問答等の序分を示現して世尊法久後要當説眞實今正是其時決定説大乘とて方便品及人記品等の八品を説て釋尊在世値遇の一切衆生螻蟻蚊虻に至るまで皆成佛道の華菓を結ばしむ爰於て佛は如我昔所願今者已滿足の大願を成就し化一切衆生皆令入佛道の本懐を遂げ玉へり然りといへども佛自ら慮ひしての玉は



く釋尊の在世に生れ後れ後佛の彌勒に生れ前立二佛中間の衆生生死長夜の闇に迷ひ六道流轉の凡夫とならんことを悲み正像末三時の法華經弘通の導師を求む馬鳴龍樹天台傳教吾祖日蓮聖人是なり就中佛第三末法濁惡の衆生を憐み法華經涌出品の時過八恒沙の諸菩薩の末法濁世法華弘經の懇請を停止して過去遠々五百塵點劫の昔釋尊本因初住の時より師弟の契りを結びし本化上首上行等に鳳詔を下し法性の淵底より涌出せしめ壽量品を演説し而して後神力品に至て佛十種の大神變を現じ十方分身の諸佛世尊證明法華の多寶如來三佛顔貌を並べ多寶塔中へ上行菩薩を召し出し如來一切所有之法如來一切自在之神力如來一切秘要之

藏如來一切甚深之事皆此の經に於て宣示顯說すと壽量の要法を四句に結んで本化の菩薩に附屬し末代惡世の一切衆生を敎化利益せしむ其の所囑の法と者謂ゆる妙法蓮華經の五字なり○爰に於て末法に入り百七十一年貞慶元年二月十六日上行菩薩の再誕として日本國に出現し玉ふ即ち吾祖日蓮聖人是なり吾祖は佛勅に應じて深く諸宗の邪義を糺明せんが爲一の格言を立つ所謂念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊天台過時諸宗無得道墮地獄の根元法華一乘獨特の成佛と身輕法重死身弘法の金言に任せて弘通し玉ひしかば經文の如く三類の强敵忽ち起り惡口罵詈刀杖瓦石流罪死罪の王難數度に及べり然れども不撓不屈の大悲力を以て遂に三秘の大法を立つ所謂本門の本尊本門の戒壇本門の題目是れなり是れ本佛の再生にあらずんば爭か此の大慈悲力を垂れ玉はんや蓋し向に云ふ

**○念佛無間**とは○已に云が如く淨土宗は方等部內の觀經雙觀經阿彌陀經の三部を依經とし稱名念佛の行を以て西方往生を立是れ方便無得道の說なり○加るに自宗の弘敎を謀が爲自讃毀他を以て顯密の諸大乘經就中法華經は難信難解にて無智の衆生の機に叶はずと謗り曇鸞法師は法華經等の諸經を難行道となし淨土の三部經を易行道とたつ又道綽禪師は法華經等の聖道門は未有一人得者と誹り淨土門を唯有淨土一門可通入路と立又善導和尙

は法華經の諸經を難行とし千中無一と詈り念佛の行者を正行とし十即十生百即百生と立法然上人は法華經等の諸經を捨閉閣抛と謗じ剩へ阿彌陀佛を禮拜し恭敬し稱名するを除て已下一切諸餘の佛菩薩等及諸天善神等を禮拜し恭敬し稱名するを悉く禮拜雜行恭敬雜行稱名雜行と名くと放逸無慙の謗言を吐き罵詈至らざるなし是れ彼の宗徒等破法破佛破國の數罪に依り無間墮獄疑ひなきものなり○法華經方便品に曰く法を破して信ぜざる故に三惡道に墮と○又曰く當來世の惡人佛說の一乘を聞て迷惑して信受せず法を破て惡道に墮と○涌出品に曰く若此經に於て疑を生じ信ぜざる者あらん即當に惡道に墮べしと○譬喩品に曰若人



信ぜずして此經を毀謗せば則一切世間の佛種を斷乃至其人命終ると阿鼻獄に入んと○夫れ釋尊の金言明白なり若し爾らば法華經誹謗の人師墮獄せんこと疑ひあるべからず獨り人師に止らず此の宗を信じ此の流を汲の徒師弟檀越亦脫る可らず師は針の如く弟子は糸の如く其の師の墮る所第子亦墮弟子の墮る所檀越亦墮と金口の佛說豈に恐れざるべけんや次に

**○禪宗天魔の所爲と者○此の禪宗も方等十六年の內楞伽經首楞嚴經金剛般若經等を依經とす(現今我國に禪宗なる總名なく臨濟曹洞黃檗の三派を存るのみ爾るに世人多くは此の三宗を一括して禪宗と稱す故に今之に倣ふて禪と稱す)此の宗の始祖達磨**

の主義は教外別傳不立文字直指人心見性成佛と立つ是れ禪家の本領なり○然るに達磨が宗義を惠可禪師に傳授して曰く吾に楞伽經四卷あり亦用て汝に附す即是れ如來心地の要門諸の衆生をして開示悟入せしめよと是れ○(傳燈三の卷に載する所なり)加之ならず○禪宗に於ては首楞嚴經十卷金剛般若經三卷諸法無常經二卷圓覺經楞伽經等是を五大部と稱して月支震旦に行はる若爾らば不立文字と云へども必ず不立文字にあらず又爾りとせば彼書六祖檀經には諸佛の妙理は文字に關するにあらずと述即ち教外別傳を主とす爾らば則彼の宗の本領は教外に別傳あるにあらず本來無一物は禪宗の主義なり彼等の空々は通教の但空にし



て法華經の三諦の空假中の空諦にあらず故に○天台大師破して云く禪家の空々は鳩のグウ〳〵と鳴に同じ又即々と云は鼠のソク〳〵と鳴に同じと夫れ教外別傳ならば非佛弟子なり不立文字ならば非佛教なり其の所以何んとなれば佛○涅槃經に說て曰く若佛の所說に順はさるもの當に知るべし是の人は是れ魔の眷屬なり○大論に云く諸法實相を除て餘は皆魔事と名くと○像法決疑經に云く諸の比丘亦復自ら稱すらく我は是れ法師我は是れ律師我は是れ禪師なりと此の三種の學人能く我が法を滅せん更に餘人にあらず此の三種の人迭相過を說迭相毀呰せん此の三種の人地獄に入こと猶箭を射るが如しと○又云諸の惡比丘或は禪を

修ることあらん經論に依らず自ら己が見に遂ふて非を以て是となす是れ邪是れ正と分別すること能はず遍く道路に向て我れ能く是を知る我能く是を見る如是言を作ん當に知るべし此の人は速に我法を滅せんと○弘決の一云世人多座禪の安心を以て名て發心となす此の人は都て所縁の境を識らず所縁の理なければ全く上求なし大悲を識ざれは全く下化なしと○又云く若名を聞ずんば何に從て能く了せん世人教を蔑にして理觀を尚ぶ者は誤れるかなと亦○弘の二云く若此の身是即佛なりと謂は〻釋尊已に滅し慈氏未だ降らず又復是れ他方の佛の來るに非ず若魔賊に非んば是れ誰とか謂んや○天台略法華經に曰く一々文



〻是れ眞佛なり眞佛法を說て衆生を利す衆生皆已に佛道を成す故に我れ法華經を頂禮すと○蓋し夫れ是の如し經論釋疏明白にして禪宗の所立天魔の所爲なることを知るべきなり○皆文字即解脫の道理なるに拘はらず不立文字以心傳心ならば何に便りて悟道すべきや況んや經々は月をさす指の如し瘡を拭ふ紙の如しなんど誹謗せり此の謗罪に依り墮獄せんこと炳かなり次に

**○眞言亡國**とは○此の宗は大日經蘇悉地經金剛頂經の三部を以て宗旨をたつ此の三部も方等部内の經なり法華經は諸經中王最爲第一と教主釋尊が御判を押し多寶佛十方の諸佛は皆是眞實と證明を加へ玉ふ所の法華經をば打破し還て權教方便たる眞言の

大日經等を第一となし剩へ之に對し法華經を第三戯論と下し我も亦是れ世の父と名らせ玉ふ五百塵點却已來の主師親たる壽量品の釋尊をして眞言の覺鍐は驢午の三身は車を扶ること能はず顯宗の四法は履を採るに堪へずといへり驢午の三身とは法華々嚴般若深密經の教主の四佛なり顯宗の四法とは法相三論華嚴法華の四法なり此等の法と佛と僧とは眞言宗の法佛に對すれば大日如來弘法大師の草履採牛飼車輓にも及ばぬ佛なりと罵詈讒謗至らざるなく彼の月支の大慢婆羅門に異ならず此等の謗法罪何ぞ入阿鼻地獄を免るべけんや餘は繁が故に之を略す歸する所吾日本國に十二宗三十餘派ありといへども天台及吾日蓮宗を除く



の外何れも皆權經無得道の教論に依り開教立宗せるのみならず宗々の人師に誤り多し釋尊の本懷に悖る邪宗邪派なり亦天台宗も元祖天台等の如く法の儘に弘通あるも今末法に入ては去年の暦の如く時機不相應の教なり剩へ慈覺智證の代に至り眞言念佛に誑感せられ權實雜亂の邪宗に墮落せり○蓋し吾祖日蓮聖人は本化上行の再誕として吾國に降生すといへども其實は本門壽量品の本主にして久遠の釋尊なり見知未萠の大聖なり經に所謂如日月光明能除諸幽冥斯人行世間能滅衆生闇の大教主なり深く法華の大要を得て末法濁世に弘宣し一切衆生を救濟せり其大要と者即本門壽量文底秘深の大法本門三大秘法是なり○此の宗旨の

三箇を顯示するに就て宗教の五綱を立所謂○錄内十二顯謗法抄に曰く夫れ佛法を弘んと思者必五義を存じて正法を弘むべし五義と者一には教二には機三には時四には國五には佛法流布の前後也と云云○餘の四は暫く置て論ぜず○第一の知教と云に就て開目抄には五重相對を立本尊抄には五重三段を明す之を約して四重の興廢三重の秘傳とす錄内二開目抄に曰く一念三千の法門は但法華經の本門壽量品の文の底に秘ししずめ玉へりと云云○此文に爾前權教を嫌ふ故に但法華經と云ひ是一重なり法華經八卷本迹二門の内壽量品を除て餘品を嫌ふが故に但壽量品と云ふ是れ二重なり次に壽量品といへども文上教相を嫌ふて但文底秘



沈と云ふ此の三重の淺深を明し取捨を判ずるに自から四重興廢あり○内廿四十法界抄に曰く法華本門觀心の意を以て一代聖教を案ずるに奄羅果を取て掌中に捧るが如し所以者何迹門の大教興れば爾前の大教亡す本門の大教興れば迹門爾前亡す觀心の大教興れば本迹爾前共に亡す此は是れ如來所說の聖教を從淺至深して次第に迷を轉ずるなり云云と○此の第四觀心の大教に二義あり天台所弘の熟脫觀心の大教と蓮祖弘宣の末法下種觀心の大教となり○夫れ蓮祖弘通の大法は在世釋尊本果脫益の妙法にあらず壽量文底本因下種妙法なり○本尊抄に曰く彼は脫此は種彼は一品二半此は但題目の五字なりと是則ち種脫相對第三重の法

門なり○内世一常忍抄に曰く惣御得意候法華經と爾前經を引向て勝劣淺深を判ずるに當分跨節の事に三の様あり日蓮之法門は第三の法門也世間に粗夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候と云云○今謹で之を案ずるに一には爾前權經は當分法華迹門は跨節是權實相對して勝劣を判ずる第一の法門なり二には法華經の中に於ても前十四品の迹門は當分後十四品の本門は跨節是本迹相對して勝劣を判ずる第二の法門なり三には法華經の肝要本門壽量品の文上は教相脫益にして當分文底下種久遠實成名字の妙法は跨節是れ種脫相對して勝劣を判ずる第三の法門なり是則宗祖出世の本懷なるが故に日蓮が法門と云ひ文底祕沈と云



意此に在り學者深く之を案ずべきなり然るに日蓮宗中各派の輩此の義を知ず只天台の第三を取り即ち宗祖の第三となすを以て此の三種の教相を辨へざるが故に一切の法門皆悉く迷亂せり

# 一代聖教諸宗一覽 下

開山上人御詠

四方山乃高根〳〵を
めぐりきて
富士の裾野に
かゝる白雲

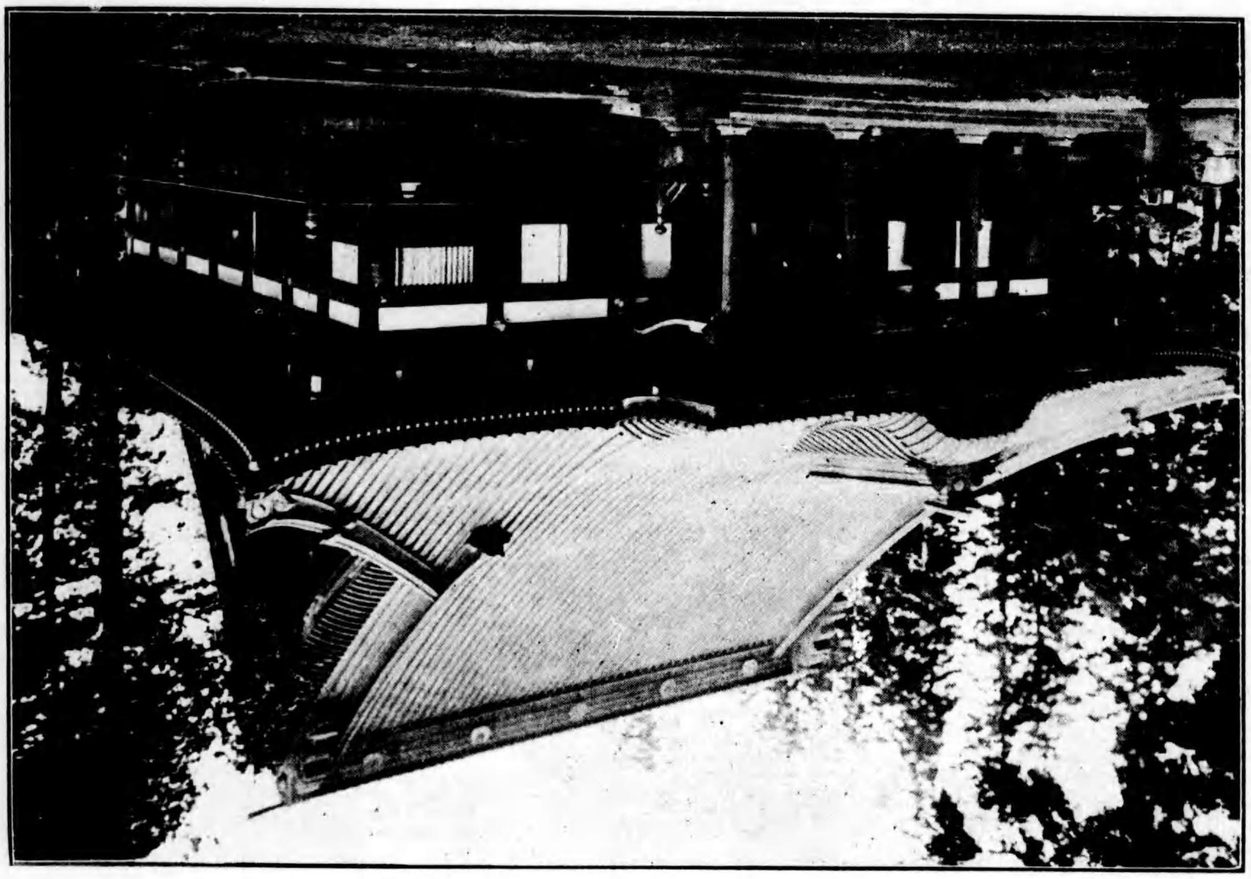
雪白なるか

に野趣の士富

んでなりぐめ

な〳〵祖高乃山方四

精舶人士山閑



圖之堂御寺石大山本總宗正蓮日

大石寺五重塔

## 日蓮宗一致派

法華經一部爲所依
本迹一致妙法爲正意
佛寶—釋迦應身如來
法寶—法華經本迹二門妙法
僧寶—上行日蓮

○日蓮宗—舊一致派

身延山者宗祖聖人創建而滅後遺附日興上人同師住之七年依波木井之謗法遂捨之離山後移富士建富士大石寺住焉

- 池上本門寺 開山日朗
- 京都妙顯寺 開山日像
- 身延山久遠寺 開祖宗祖聖人
- 京都本國寺 開山日朗
- 中山法華經寺 開山日常

○日蓮不受不施派 備前妙覺寺派祖日奥

○日蓮宗不受不施講門派 備前本覺寺派祖日講

元日蓮正宗總本山大石寺支流

## 勝劣派

○本門宗—舊興門派

- 北山本門寺
- 西山本妙寺
- 下條妙蓮寺
- 京都要法寺
- 伊豆實成寺
- 房州妙本寺
- 小泉久遠寺

後世唱異義各自稱本山

法華經本門八品爲所依
八品所顯妙法爲正意

○本門法華宗—舊八品派—
- 光長寺 本興寺
- 鷲山寺 妙蓮寺
- 本能寺 開祖日法日隆

法寶—八品所顯之妙法
佛寶—脫佛釋迦
僧寶—上行日蓮

一部修行本勝迹劣本門壽量爲所依壽量文上所顯妙法爲正意

○顯本法華宗—舊什門派—京都妙滿寺 開祖日什

法寶—壽量文上本果妙法
佛寶—壽量品脫益釋迦
僧寶—上行日蓮

一部修行本勝迹劣唯本無迹壽量文上本因妙爲正意

○法華宗—舊本成寺派—越後本成寺 開祖日印

法寶—壽量文上妙法
佛寶—壽量脫益釋迦
僧寶—上行日蓮

○本妙法華宗—舊本隆寺派—京都本隆寺 開祖日眞

宗義本成寺同





法華本迹二門理一念三千妙法爲脫益只本門壽量文底下種久遠元初名字事一念三千妙法爲正意
宗祖曰日蓮ガ法門ハ第三ノ法門也又曰一念三千ノ法門ハ但壽量品ノ文ノ底ニ秘沈玉ヘリト文是指種脫相對云第三云文底秘沈也

○日蓮正宗元富士派

總本山富士大石寺
開山日興上人

法寶 本門壽量文底下種事一念三千南無妙法蓮華經之大漫荼羅
佛寶 本門壽量文底下種本因妙法主日蓮大聖人
僧寶 血脈附法大導師開山日興上人

宗祖ノ相承ニ云ク日蓮一期ノ弘法附屬白蓮阿闍梨日興又云釋尊五十年ノ說法相承白蓮阿闍梨日興云云

○日蓮宗○已に舊一致派現今單に日蓮宗と稱する彼の身延山久遠寺を始め池上本門寺中山法華經寺京都本國寺妙顯寺等の諸山は何れも其の開祖に溯りて之を觀れば行戒智德の御弟子方なりといへども皆是れ不相傳家なるを以て宗祖滅後幾程ならずして宗祖の法流を滅却し天台の諸流を汲み法華經一部を所依とし本迹無勝劣一致の妙法を正意となす故に本迹二門の妙法五字を法寶とし天竺出現螺髪應身の釋迦を以て佛寶として却りて久遠本佛たる宗祖日蓮聖人を僧寶に下す豈に破佛法の罪人と云はずして何んぞや○夫れ法華經に三種の差別あり一には迹門二には本門三には久遠名字の法華經なり爾るに彼の一致宗の族は天台通

途の實相同理體同等の判釋に迷ひ一往は本迹の勝劣あるが如し
といへども再往の實義即實相の理體は本迹異なることなしとて
尚一二の本迹を混雜して一致と立故に宗祖の本懷たる第三の法
門即下種の法華經を辨知せざる者と云ふべし之を了知せるもの
本宗の外更に有る可からず○蓋し祖書内廿八治病抄に法華經に
又二經あり所謂迹門と本門となり本迹の相違は天地水火の違目
なり例せば爾前と法華經との違目よりも猶相違あり乃至本迹を
混合するは猶水火を辨へざる者なり云云と○又傳教大師の釋に
は能詮の教權經方便ならば所詮の理體も亦權教方便の理體なり
能詮の教實ならば所詮の理も亦實理なりと權實教理の淺深を示



せり已に權實の淺深斯の如くならば本迹の理に於て亦淺深ある
ことを知ぬべきなり○妙樂大師の曰く今此の本門は身に約し理
に約し身事に約すといへども須く理を開すべしと此の文は迹の
理を開して本の理を推すぞとの意なり若し本迹の理體同一なら
ば妙樂何ぞ煩しく迹門の理體を本門に開するの理あらんや○次
に又實相同の故に本迹一致なりと云んか○妙樂又此の實相に於
て本迹の淺深を釋して曰く此の釋を作らずんば尚を昔の教の中
の實を見ず況んや開顯の實をや況んや久遠の實をやと云云○此
釋中の三實相は即爾前迹門本門の三妙法なり故に昔の教の實開
顯の實久遠の實と云へり然るに實相同の故に本迹一致と云はゞ

妙樂の所謂徒に本門を消失するものと云はざらんや○天台の曰く爾前迹門同あり異あり本門迹門一向永く異なりと○吾祖は迹門十四品は一向爾前に同ずと又本迹を混合すれば水火を辨へざるなりと判じ玉へり○若然らば本迹の妙法只是れ一致にして勝劣なく一往勝劣再往一致文上勝劣觀心一致なりと云はゞ實に是れ本門の規模を失ふ物怪にして天台妙樂傳教幷に宗祖日蓮大聖人の御判釋に背ける大謗法と云はざるを得ず○蓋し此の迷亂の起る起るの日に起るにあらずして由て來る濫觴あり○仰も吾祖日蓮大聖人文永十一年の夏彼の身延山に御隱籠在しゝより弘安五年壬午に至るまで九ケ年の星霜を送り御齡已に六十歳を超さ



せられ一期の御化導已に盡御歸寂の期近きにありと思召○六人の上足を定む所謂日昭日朗日興日向日頂日持の六上人なり就中第三の上足日興上人は信行智德群に秀正く大法弘通の法器たるを以て祖師大聖別して此の人を撰扱し弘安五年の九月一期の大事已證の深義悉く是に相傳し且滅後弘通の大導師たるべきの遺狀を賜ふ其の文一期弘法抄の如く而して其年九月八日吾祖は身延を發して池上に赴く是れ昔の釋迦佛が鷲峯の艮跋提河の西純陀が家にて入滅し玉ふ古例に倣ふもゝの如しといへども其の實は地頭波木井の薄信後世必ず謗法を企て終には魔境とならんことを豫知し玉ひ聖尸を永く謗法の地の枯骨となさんことを憂慮

し玉ひしに外ならず正しく其の十月十三日の曉に至り入滅の後は遺弟等興師を以て身延山久遠寺の別當に尊崇すべきの遺命あり即池上相承是れなり而して同日辰の刻に至りて終に安祥として入寂す十四日御葬禮の營終り御尊體を荼毘して御骨を身延に登せ御中陰の御佛事を經日昭日朗等の老僧等師の御遺言とは云ひながら若輩の興尊の座下にあるを耻じ各の本國に下向せり興尊獨り身延に止り朝暮の行法宗祖在世の如し星霜押移り正應元年故聖人の七回忌に當れり三回忌にも已に老僧方の登山なく本年亦登山覺束なしとて老僧方へ回文を賜ふ其の文に驚き各登山す就中上總の藻原に下向せる向師は已に登山して波木井の家に



投ず其の後遂に波木井は向師と謀り宗祖違背の謗法を企つ一には釋迦佛の木造を造立す二には三嶋明神に社參し神馬を引戸帳を捧ぐ三には念佛の寶塔供養四には九品念佛道場建立是なり是を波木井四箇の謗法と云ふ日朗上人の遺書に云く○（品類抄第五）波木井殿の謗法限りなきに依り五人同心に彼の山を出離する處に彼の日向は日蓮弘通の本意に背き大謗法の波木井の施を受けて彼の山に留ること師敵對なり日向は禪念佛の宗旨にも劣れりと云云○彼の波木井の謗法を原因として日向の邪義彌よ年舊本迹一致の謬見を起し權實雜亂の爲體宗祖の法義は殆んど地に墮たりと言はざるを得ず恰も天台宗の末慈覺智證に於けるが

如し但し舊一致者流の中に不受不施派不受不施講門の二派あり
といへども其の宗義大同小異にして同く一致の邪流なり敢て論
ずるの價値なし故に之を省く次に種脫雜亂の勝劣派を擧れば舊
八品派即ち

**○本門法華宗**○該派は日隆を派祖とす法華經本門の中に於て涌
出品より囑累品に至る八品を以て正依の經とし八品所顯上行所
傳の妙法を正意とし法寶とす脫益の釋迦を以て佛寶となし上行
日蓮を以て僧寶とす○抑も八品正意の邪義但限八品の謬解起は
吾開山日興上人の弟子總本山塔中寂日坊日華上人の弟子に肥前
坊日傳と云ものあり法門の異義より師の勘氣を受け甲州鰍澤に



弘通す○然るに日傳觀心本尊抄の如し是の本尊は在世四十餘年に
無之八年の間但限八品の文幷に本門六品立座但八品之間來
還す云云の文に依て宗祖の御本意は正く八品に在り八品は本尊
出現の要經なりと得意し窃に八品正意の邪義を弘む此の時に當
り岡の宮興長寺に日春なるものあり彼の日傳の謬解に迷惑し八
品に改宗し遂に下種の妙流を濁すに至れり○夫れ興長寺は日法
上人の開基にして吾開山上人に隨從して彼の身延を離參せる人
なり故に本宗と等く一點の邪義なかるべし爾るに二代日春に至
て彼の邪義に陷る吁是れ不相傳の門家悲むべきなり其後宗祖滅
後百三十餘年の後應永年間京都妙顯寺日際の弟子日隆なるもの

同く但限八品の文に依て八品正意を立つ夫れ本尊抄八年之間但限八品の現文は付囑流通を示し玉ふの金言なり大段本尊の戒付囑の義戒との兩段ありて今前條の金文は只是付囑の始終を顯すのみ正しく本尊を顯はすに非ず凡て本尊を顯はすことは壽量の一品に限るべし故に次下に云く未有壽量品佛來入末法此佛像始可令出現歟と云云○此の文明に本門の本尊たる本化の上行等を脇士とし玉ふ本尊は壽量品の本尊なりと說給へり故に復其の次の文に本門壽量品の本尊なりと說給へり故に尙其の次の文に本門壽量品の本尊並に四大菩薩等と云云○夫れ此等の御文孰れも壽量品の佛壽量品の本尊との玉ひて八品の佛八品の本尊とはの玉はざるにあらずや○蓋し夫れ本尊抄は我が內證の壽量品との玉ひて外相文上の壽量品尙之を簡ひて文底種本を顯はし玉ふ宗祖の本意なり何ぞ煩はしく八品を依用とせんや今末法に入ぬれば餘經も法華經も詮なしと豈に夫れ八品無益に非ずや

**○顯本法華宗**○舊妙滿寺派或は什門派と稱し本山は京都妙滿寺なり日什を派祖とし一部修行本勝迹劣本門壽量品を所依とし壽量文上本因本果一體の本果妙の題目を正意とす該派は能く本迹の起盡を明にし開迹顯本の法義を示すものゝ如しといへども未だ宗祖出世の本懷たる種脫相對の本因本果の妙義を知らず故に彼れ敎相判釋に付て隱顯二敎を明すに及び天台の第三たる師弟

の遠近不遠近の教相を以て宗祖の第三となし天台の一品二半の文上脱益の法門を以て宗祖觀心の一品二半となす本尊抄の彼脱此は種の差別を知らず附文元意の二義を辨へず内證外用の二邊を了らず爭か壽量の本佛を現はすを得んや○夫れ彼徒所立の開權顯遠の法門は宗祖所立の開近顯遠の法義にあらず○蓋し觀心本尊抄に本門の序正流通を二段に顯說し給へる其文に又本門十四品の一經に序正流通ありと是れ彼等所立の壽量の一品二半にして所謂天台教相の所談なり即宗祖の第二の法門たる本迹相對の法門に屬す次に又本門に於て序正流通ありと是れ宗祖所立觀心の一品二半にして滅後の正宗なり宗祖は彼等所立の本門脱益



の正宗たる壽量文上の一念三千を廢て末法下種の正宗たる本因妙の題目を顯はして彼れは一品二半此は但題目の五字なりと又彼の脱益の教主たる釋尊を拂ひ末法の教主宗祖日蓮を尊重せしめんが爲に彼は脱此は種と本尊抄に判し玉ひしなり疑ふ可らず故に○同抄に曰く一品二半よりの外は小乘教邪見教未得道教覆藏教等と云云○又曰く迹化他方の大菩薩等に我内證の壽量品を以て授與すべからず末法の初誹法の國惡機なるが故に之を止め地涌千界の大菩薩を召して壽量品の肝心妙法蓮華經の五字を以て閻浮の衆生に授與せしむと云云○取要抄に云く壽量の一品二半は始より終に至るまで正く滅後の衆生の爲滅後の中には末

法日蓮等の爲なりと云云文にの玉ふ此の內證の壽量品たる本因下種の要法は教主釋尊の所用にあらず只宗祖大聖の特有にして末法の一切衆生成佛の大法なり○然るに此の種脫の法門に迷惑して末法今時脫益たる法華經壽量文上の教相を以て正意とするは時機を知らざる痴漢なり○凡そ彼の宗の所立たる顯本とは即壽量文上の顯本にして久遠本果の成道を以て本地自行と名け此の本果の本を顯すを彼の宗の壽量の顯本とは云ふなり○宗祖の顯本即正宗の所立は久遠元初の成道を以て本地自行と名て此の久遠元初を顯はすを壽量文底の顯本と名くるなり彼此の法門天地の如し夫れ文上顯本に體內體外の二意あり內外異りといへど



も文底種本に對すれば共に脫益となるなり得脫に於て內證外用の不同あり○本尊抄に云く以久遠爲下種大通前四味迹門爲熟至本門令登等妙爲脫を云云等妙に登らしむるとは即體外の意妙覺に登らしむるとは即體內の意なり釋尊在世の衆生壽量品を聽聞して但に十住乃至等覺に至て妙覺に至るの人都て之なしといへども體內の意は靈山一會の大衆體內の壽量を聽聞して文上の脫益を信ずるのみにあらず復文底秘沈の種子を了り久遠元初の下種の位に立還て本地難思境智の妙法を信ず故に皆悉く名字妙覺の極位に至るなり○荊溪の云く故聞長壽復了宗旨云云○又若但信事中遠壽何能令諸菩薩等增道損生至於極

位に故信に本地難思境智等云云○吾祖祈禱抄に諸菩薩皆上妙覺の位等に釋迦如來の悟と判じ玉ふは是なり故に顯本宗の壽量顯本は三五下種を顯はす顯本にして且く是れ吾宗第一第二の意なり若第三の教相顯れ己れは在世の衆生は皆悉く久遠元初下種の人なり且く身子の如し鹿苑に斷惑す只是當分の斷惑にして跨節の斷惑にあらず是則種子を知らざるが故なり然るに法華に來至して大通の種子を覺知す是則跨節の斷感なり爾れども若本門に望れば猶是當分の斷惑にして跨節の斷惑にあらず久遠下種を了せざる故なり而後本門に至て久遠の下種を顯はす此即跨節の斷惑なり然りといへども又文底に望れば猶是當分の斷惑にして跨



節の斷惑にあらざるなり若文底の眼を開いて還て彼の得道を見れば實に久遠元初の下種の位に還て名字妙覺の極位に至る此即眞實跨節の斷惑なり○故に經に云以信得入と云云以信は名字なり得入は即是妙覺なり○又云我等當信受佛語と云云宗祖の云此の無作の三身は一字を以得なり所謂信之一字也云云信は即惠の因にして名字即なり無作三身豈に妙覺にあらずや身子既に爾なり一切爾らざるはなきなり學者宜く之を案ぜよ次に

**○法華宗**○舊本成寺派は朗師の弟子日印を派祖とす○大本山は越後國蒲原郡本成寺なり京都本禪寺は第三代日陣遺魂の所にして小本山とせり是亦一部修行本勝迹劣唯壽量と立つ同く宗祖第

二の教相所談にして第三教相の本意に至らず聊か一致八品等と簡別せるのみ宗祖の所謂吾が内證の壽量品にあらず○夫れ已に云が如く具に論ずれば四種の壽量あり大別して二つあり應佛所說の壽量品は在世の諸衆を脫せしめたる釋尊化導の終りなり本佛所說の壽量品は末法惡世の衆生を下種し給ふ利益の初なり同く壽量品なりといへども文上文底教相觀心大に差別あり文字雖一而義各異深く之を思ふべし又彼の宗一部修行を專らにすといへども是亦宗祖正意にあらず○蓋し末法は初心本因名字即の修行なるが故に一部讀誦を專らとせざるなり○夫れ宗祖の在世に偶々一部を讀誦し玉ふことあるも是れ傍意にして正意にあらず



已に四信五品抄等に制し玉ふが如くなり豈虔まざる可んや次に日蓮門下の本尊を論せば

**○日蓮宗各派**の本尊は在世脫益の儀式を顯揚せる像法過時の本尊にして今末法應時の本尊にあらず悉く皆宗祖違背の迷亂たり○仰も各派所立の法義は相互の間多少の懸隔ありといへども本尊式の如きは何れも差違あることなく皆釋迦多寶の二佛並に本化迹化の四菩薩等の尊像を造立して是を本尊の正躰となせり○身延日重の愚案記に云く開迹顯本の教主は或は報身と云ひ或は應身と云ふ門流の（一致）意は應身なり立像の釋迦は螺髮にして應身の貌なり去れば兩佛を作とも此形を移すなり假令座像か立

像かの異ある計なり印契も立像の印を移すなり他門流天冠に造は他受用報身意なり何も苦からず三身相即して暫も離る時なし故此意解すべし云云○夫れ斯の如く一致門流に於ては螺髪應身の立像佛の身相を座像に摸造し二佛並座の法華經の教主に開會して是を本尊とし諸勝劣派に於ては正在報身不契應身の三身相即の報身佛を以て本尊とするか故に其の姿は天冠の相なりと云へり○如是應身報身螺髪天冠の不同ありといへども皆是釋迦多寶等の佛像を以て本尊とせり其外帝釋妙見鬼子母神清正公等種々の雜物を造立して本尊に勸請せる事是れ日蓮宗と稱する各派の所立なり先づ○第一に釋迦多寶等の佛像を造立する事是偏に

謗法の根元なり其の故なんとなれば宗祖正意の本尊は十界所具の大曼荼羅に限るべし故に御在世に於て信者方より願ふ所の本尊には唯々南無妙法蓮華經の曼荼羅に限りて聊かたりとも造佛を勵め玉ふ御金文はなし僅に釋迦佛造立を稱歎の御文章もあり又宗祖立像の釋迦佛を御隨身存したることなきにあらずといへども是等只一機一緣の爲且く初心の信者を誘引せんか爲の方便繼子一旦の寵愛月を待間の螢火にして全く宗祖の本意にあらず故に立像の釋迦佛に至りては世間に流布せる法華靈場記一に十月十二日酉刻北面座す華を供へ香を焚き弟子等釋迦の像を安置す師白眼て首を振朗公即ち大曼荼羅を掛師之を敬禮す十三日朝

辰刻入滅六十一歳云云と御遷化記録には立像の釋迦佛は墓所の傍に立置くべしと御遺命の趣載せられたり若し宗祖大聖人造佛を以て正意とし玉はゞ何ぞ年來隨身の立像佛を御臨終の期に望み首を振り之を嫌忌し又御遷化の後は墓の側に捨置とは御遺言なさるべきや知んぬ是れ末法下種の吾人等が爲に無益の佛像なるが故なり況や○宗祖本尊問答抄に於ては釋迦多寶の二佛を造立して本尊とする事を破て曰く不空三藏の法華觀智の儀記は寶塔品の文に由り是は法華經の教主を本尊とす法華經の行者の正意にあらず上に擧る所の本尊は釋迦多寶十方の諸佛の御本尊法華經の行者の正意なり云云との玉ひしなり○蓋し上に擧る所の



御本尊と者本抄の上の文に法華經の題目を本尊とすべしとの玉ふ所の十界所具の大曼荼羅なり是れ實に三世の諸佛の主師親にして三世の諸佛も本因下種の昔は一同に此の御本尊を境とし南無妙法蓮華經と唱へて本果の成道を遂げ玉へば三世の諸佛も常に此の妙法を恭敬供養して是を本尊と崇め玉ふ故に○涅槃經には諸佛是故に如來恭敬供養すと說く是を以て末代今の日蓮も本因下種の久遠に等く南無妙法蓮華經の五字七字に限て是を本尊となし末代本未有善の一切衆生に本因の種を下さしむるとなれば是即末法法華經の行者たる日蓮が正意の本尊にして在世脫益の本尊たる釋迦多寶等の造佛は全く末法法華經の行者たる日蓮

が正意の法門にてはなきなりと拂破し玉ふ御文意なり加之ならず○上野抄には南無妙法蓮華經と中は法華經の肝心人中の神の如し是に物を並れば后の並て二の王を男とし乃至后の大臣已下に内々とつくが如し災の根本也と示し玉へり夫れ法華經の肝心人中の魂たる本因下種の御本尊已外に在世脫益の本尊たる釋迦多寶並に妙見鬼子母神等種々雜物を並列するは譬ば后の二三の王を並べて男とし或は公卿大臣等と密通するが如く災の根元なりとの仰なり仍て○吾開山興尊の門徒存知抄に云く日興が曰く大聖人御立の法門は全以繪像木像等の佛菩薩を本尊となさず唯御書の意に任せ妙法蓮華經の五字を以て本尊となすべし即御自



筆の本尊是なりと云云○爾らば夫れ身延に於ても宗祖並に日興上人の在世には十界所顯の大曼荼羅のみにして限て畫像木像を立ざること分明なり○然るに宗祖滅後正應元年の頃波本井が日向の允許を得て身延に之を造立せり此の謗法の根元より數百年の今日に至るまで該謗法の濁水に溺れつゝあるもの幾億萬なるを知らず偶々近世其の本尊の雜多を嫌ひ單一の曼荼羅を希ふものありといへども宗祖所顯の本尊の本尊たる實體を知ず同く在世脫益の儀式を書顯せるものゝ如く思へり故に唯文字と木畫の不同のみにして大差あることなく同く在世脫益の本尊にして末法下種の本尊にあらず而して其の單一の本尊を主張するの徒と

いへども宗祖の本懷たる種脫相對の法門を知らざる故に其の法義の所論に至ては昨是今非一定の方針なく右披左靡自己の所見に任せて變更す此の邪義愚妄は是れ不相傳不血脈の所以なり

○然るに吾が本宗正宗の法義は弘安の昔より今日に至るも宗祖在世の如く色相壯嚴の佛菩薩を本尊とせず唯御書の意に任せ宗祖所顯の大曼荼羅を以て本尊となすなり就中宗祖滅後の一切衆生の爲吾が開山上人に賜る所の本門戒壇の大本尊を以て宗旨の極致とす嗚呼實に吾が本宗は一系亂れず大綱動かず連綿として化法を變せず化儀を更へず嚴然として各派に卓絕せる眞の日蓮宗なり



○日蓮正宗○向に興門派と稱し支派七箇本山等と諦盟し來りたるも彼我法義の異るより屢布教興學の衝突を來し本宗の眞面目を持つ能はざるを慮り去る明治卅三年中官に訴へて獨立の認可を得爾後日蓮宗富士派と稱し又改稱して日蓮正宗と稱す駿河國富士郡大日蓮華山大石寺は本宗の總本山なり○當山は白蓮阿闍梨日興上人の創立なり師は宗祖の御弟子第三に列し若年に在すと雖も已に述るが如く死身弘法の行態他の五老僧と異るありて宗祖之を賛美して行戒智德の沙門と稱す故に滅後弘教の導師として遺狀を賜ふ其文に曰く○日蓮一期の弘法白蓮阿闍梨日興に附屬す本門弘通の大導師たるべきなり國主此法を立らるれば富

士山に本門寺戒壇を建立せらるべきなり時を待べきのみ事の戒法の謂れ是也就中我門弟此狀を守るべき也弘安五年壬午九月日日蓮在判○血脈の次第日蓮日興と此書は一期弘法抄と號し錄外十六の四一に出又遺文錄には日興付屬として二一〇五の卷に在り期く遺命有て宗祖は同月八日に身延を發し武州池上宗長が館に赴き興師之に供奉す而して復十月十三日の曉御涅槃の期に臨み遺弟等に興師を以て身延山の貫主と仰ぐべきの遺命あり其文に云く○釋尊五十年の說法白蓮阿日興に相傳す身延山久遠寺の別當たるべし在家出家共に背く輩は誹謗の衆たるべき也弘安五年壬午十月十三日日蓮在判○於武州池上如上の御遺命に由



り興師は五老僧を卒ひて身延に歸り已に御佛事も終りしかば老僧等各本國に下向せり獨り興尊のみ身延に殘りて如法の勤行怠りなく今日過ぎ明日と暮し星霜遂に移りて正應元年宗祖聖人の第七回忌に當り老僧等各自登山せり爰に於て波木井日圓は向師と謀り彼の謗法を企つ興師は大に驚き經釋祖判の明文を引懇篤諫諭に及といへども日圓更に用る色なく尙向師の許として謗法の所行至ざるなく是唯事にあらず偏惡鬼入其身の所爲なるべしと歎息宗祖豫ての遺言にも地頭不法ならん時は我が神ひ此の山に住す可らずとの金言今猶耳底に存せり蓋し斯の如く謗法に穢れたる此の身延に爭か故聖人の魂魄住渡せ玉ふべきやされば急

ぎ此地を去り何國なりとも此正法を維持し廣宣流布の時を待に如ずと思惟し宗祖出世の本懐本門戒壇の大本尊を始とし正御影及び宗祖より附屬の靈寶等都て殘りなく牛馬に駄し日法日辨等の中老及び日目日華巳下の御弟子旦那三十餘名を引卒し住慣玉ひし身延の澤を涙と共に立出玉ひしは正應元年霜月の初旬なり波木井日圓之を聞き大に驚き岩本實相寺住僧賢秀日源を介し師に身延歸住を懇望すといへども師は深く考慮する所ありて固辭せられ終に和議調はず其後師は駿州上野の郷主南條七郎次郎時光の請に依り富士上野に至り爰に一宇を創立し廣宣流布の時迄も永く異地に移す可らずとて其の地名を取り大石の寺と號す是則吾が日蓮正宗總本山大石寺正統一宗の濫觴なり○抑も興尊身延離散は偶然此に出るにあらず蓋し宗祖の聖鑑波木井の謗法を豫知し魔窟の延山に聖尸を永く埋め玉はんことを憂慮し玉ふのみならず彼の地は一天廣布の砌り本門戒壇を建立すべきの靈地にあらざるなり所以何んとなれば宗祖三大秘法抄に示て曰く戒且者王法佛法に冥じ佛法王法に合し王臣一同に三秘密の法を持有德王覺德比丘の其昔を末法濁惡の末來に移んとき勅宣御教書を申下し靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立せらるべきなりと云云此の書は弘安四年宗祖身延に在て富木常忍に賜はりしなり之に由つて之を觀るに身延は是れ戒壇建立すべき

靈地にあらざるが故に他に最勝の地を求むべしとの聖意なること分明なり而して其の最勝の靈地を弘安五年九月に至て宗祖興尊に對し之を指示して曰く國主被レ立二此法一者富士山二可レ被建レ立二本門寺戒壇一也と嗚呼興尊の延山を離散し玉や又所以あるかな○抑も本宗開教立宗の主義眼目は法華經本迹二門事理の一念三千の妙法を脫益となし同く理に屬さしめ只本門壽量文底下種久遠元初名字眞の事の一念三千の妙法を正意とす此の壽量文底秘沈の三大秘法の正法は彼の日宗勝劣各派が唱導する教相文上壽量の法門に非ず○錄內二の卷開目抄に云く一念三千の法門は但法華經本門壽量品の文の底に秘し沈め玉へりと云云○文に云ふ唯法華經と者爾前權教權宗を拂斥して只法華を採用す即彼の一致者流の法義是なり次に本門と者彼の法華迹門を嫌ひ只本門を取本迹相對を極意とする八品正意者流の法義なり次に本門壽量品と者本迹二門俱に嫌ひ只壽量の一品を取て本迹相對の勝劣を最極とする顯本宗及本成寺派本隆寺派等の宗義なり文底秘沈と者正宗は彼等の最勝とせる本門壽量品も理上の法相なる故に本迹共に理の一念三千なりと嫌ひ只文底秘沈との玉ふ觀心直達事行の一念三千の妙法を正意とする宗旨なり○常忍抄に曰く日蓮が法門は第三の法門也と云云○十法界抄に曰く法華本門觀心の意を以て一代聖教を案ずるに奄羅果を取て掌の中に捧るが如

し所以者何迹門の大教起れば爾前の大教亡す本門の大教起れば迹門爾前亡す觀心の大教起れば本迹爾前共に亡す此は是如來所説の聖教の從淺至深して次第に迷を轉ずるなりと云云○御義口傳上曰く酒に重々有之權教は酒法華經は醒たり本迹相對する時迹門は酒也始覺の故也本門は醒たり本覺の故なり又本迹二門は酒也南○經は醒たりと云云類文繁多なるが故に餘は之を略す宗祖の所謂日蓮が法門は第三の法門とは是なり○然るに已に述るが如く彼の日宗各派の一致八品及顯本宗等は天台三種の教相中師弟の遠近不遠近の相を以て宗祖第三の教相となす天台第三の教相は本迹二門の相對なり宗祖第三の教相は種脫二種の相對な



り天台三種の教相は宗祖の一二に攝すべし故に云ふ彼の徒は天台の餘流にして宗祖の末流に非るなり○夫れ種脫興廢の深義とは一代應佛の範圍は理上の法相にして一部共に理の一念三千迹上の法門壽量品なりと得意せるを文上脫益と云なり久遠實成名字の妙法を直達正觀する事行の一念三千の南○經を文底下種と稱するなり○御義口傳下に曰く當品は末法の要法に非るが其の故は此品は在世の脫益也題目の五字計當今の下種也然ば在世は脫益滅後は下種也仍て下種を以て末法の詮と爲す云云○觀心本尊抄に曰く在世の本門と末法の初は一同に純圓也但し彼は脫此は種也彼は一品二半此は但題目の五字也と云々○又久遠名字の

妙法たる其體如何となれば夫れ大覺世尊久遠五百塵點の當初世に教法なく文字なかりし時に於て一惑未斷の凡夫たりし時天然法爾と内薫自悟し即座開悟す曰く天地乾坤人畜草木森羅萬象悉く妙法蓮華經の五字なりと即座に本因本果本國土の三妙を同時證得し玉ふ所を久遠名字の妙法とも又久遠元初一迷先達不渡餘行直達正觀事行の一念三千の南無妙法蓮華經とも云ふなり此の能證の人を本地自受用報身無作三身の如來とも本門壽量當體の蓮華佛とも本因妙の教主とも稱するなり○惣勘文抄に曰く釋迦如來五百塵點の當初凡夫にて御座し時我身地水火風空なりと知しめして即座に開悟し後に化他の爲に世々番々に成道し在々處



々に八相作佛す等云云○三大秘法抄に曰く大覺世尊久遠實成の當初證得の一念三千也と云云○當に知るべし釋尊久遠實成の當初凡夫の御時一念三千の妙法蓮華經を本尊とし修行覺道し境智行位の四妙を成就す是を下種本因妙の修行と云ふ○此の本因の修行に依て妙覺果滿の如來となり玉ふなり此の本因下種事行の妙法をば經相文上に之を明さず唯文底に秘沈し玉へり我本行菩薩道と云も本因初住理上の法相にして下種の事行に非ず仍て文上は脫益理の一念三千文底は下種事の一念三千なり○蓋し釋尊久遠名字即の御身の修行を末法今時の宗祖大聖の名字即の御身に之を移し門弟に信行せしむるなり○然れば則久遠は末法にあ

り末法は即久遠なり故に

**○本宗の本尊は**○宗祖大聖の内證所具の十界所顯の大曼荼羅なり○是則久遠元初自受用報身如來所證の法體たる本地難思境智冥合本有無作の佛體本門壽量文底下種事の一念三千の南無妙法蓮華經なり是を三大秘法總在の大本尊と名く○此の文底獨一事の一念三千の大曼荼羅は宗祖内證已心所具の一念三千なり故に人法體一と云ふ○傳教大師の云く一念三千即自受用身と云云○報恩抄に云く自受用身即一念三千と云云故に知ぬ一念三千を物體に顯せば蓮祖大聖人なり蓮祖大聖人を文字に顯せば事の一念三千未曾有の大曼荼羅なり○然るに日宗各派の本尊は或は上行



在座の儀式に約して本門八品を正意とし或は壽量顯説の時に約し二佛並座の儀式を正體となす是れ末だ壽量品の本佛を知らざるものなり何ぞ本尊の正體を知らんや夫れ本尊に迷へば我が色心に迷ふ我が色心に迷へば何を以て生死を離るゝことを得んや

一代聖教諸宗一覽 終

大正四年八月十日印刷
大正四年八月十五日發行

【非賣品】

著述者　東京市深川區東元町十八番地寄留　大石日應

發行者　東京市芝區櫻川町廿番地　鈴木常吉

印刷所　東京京橋區西紺屋町二十七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市深川區東元町十八番地　法道會本部

終